

## 大賞

### 絵本のプレゼント

菅谷 泰枝

柳田先生、お元気ですか？お変わりありませんか？  
一年振りにまたこのお手紙を書くことができて、とても幸せに思います。

娘の泰充は、三歳になりました。男の子に間違われるほど、おてんばで活発な子に成長しました。いつも元気に動き回っています。でも、大好きな絵本の時間は、じっと耳を澄まして聞いてくれます。

今年の四月に、区の三歳児健診で絵本のプレゼントを頂きました。数冊の絵本の中から泰充が自分で頂戴する絵本を一冊選びました。

テーブルに並べられた絵本はどれも魅力的で、その中から一冊を選ぶのに、泰充はいつになく真剣に絵本を

次々と手に取っては表紙を開いて、ページをめくって見  
ては悩んでいました。

やっと出した答えは、「これと、これ。」どうしても一冊に決められなかったようです。でも、一冊に決めなくてはならないので、どちらか一冊を選んでもらいました。迷いに迷って、泰充がやっと決めた一冊は、『なつのあさ』でした。表紙から本一面に広がる夏の情景に引きつけられたようでした。実は、私もこの絵本がとても気になっていました。不思議と絵本の好みが一緒でした。

泰充は今すぐに読みたかったようでしたが、健診が終わって帰らなくてはならないので、家まで我慢してもらうことにすると、「自分で持っていく！」と絵本の入った手提げ袋を大事そうにしっかりと抱き抱えて帰りました。都電の中で、「ちょっとだけ、見ていい？」と、手提げ袋の中を覗きこんでみたり、そっと絵本を取り出して

見ていました。もう早く絵本を読みたくてウズウズして  
いました。

家に着くと早速、「これ読んで！」とおねだりされ、  
私も早く読んでみたかったので、すぐに読んであげまし  
た。

「夏の朝だって。白いんだ。」「男の子、自転車、乗  
ってどこに行くんだろう?」「汽車って?」「だっだ、し  
ゅしゅ。だっだ、しゅしゅ。」…

今までに見たことがない汽車の世界に引き込まれて、  
入り込んでいったようです。都電や都内で見る電車とは  
違う。汽車に何か感じたようでした。

絵本の男の子と一緒に、「だっだ、しゅしゅ。だっだ、  
しゅしゅ。」の音が耳の中に残ったようです。繰り返し読  
んでは、「だっだ、しゅしゅ。だっだ、しゅしゅ。」の大  
合唱で、両手を体の横で回しては、汽車になりきってい

ました。

私も、実際には汽車を見たことはありませんが、一緒  
に読んでいて思わず、実家の風景が浮かび、懐かしさが  
こみあげてきました。私の田舎は、私が子供の頃から今  
でも、一面水田の中を単線の線路で電車が走っています。  
夏は、この絵本のように緑一面の中を、電車がまっすぐ  
に、「ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。」と走っている  
風景があります。

帰省のたびに一緒に見ていたその風景のことを泰充  
に尋ねてみました。

すると、「田んぼの中。電車見たね。田んぼの中。ガ  
タン、ゴトンって。これと似ているね。」と、泰充も思い  
出しているようでした。都会育ちのお父さんも、第二の  
故郷としてこの田舎の自然が大好きで、思い出していま  
した。家族で絵本の情景と田舎の風景とを重ね合わせて

思い描いていました。

この絵本を読んで、私は自分が子供だった頃の懐かしい思い出と田舎が恋しくなりました。大人になってからの絵本は、心の奥の方をそつとくすぐって、甘酸っぱくて切ない気持ちにさせてくれます。泰充にもそんな絵本に巡り合って、素敵な時間を過ごして欲しいと思います。泰充が大人になったら、どんな絵本で今の子供時代を懐かしく思い出すのでしょうか？とても楽しみです。

今年の夏は、この絵本、『なつのあさ』を携えて、家族でまた田舎に帰りました。

### 【柳田邦男さんからのメッセージ】

三歳児健診でプレゼントの絵本を三冊の中から選ぶときの娘さん（泰充さん）の迷う心模様、選んだ『なつのあさ』を持ち帰るときの子それぞれにワクワクする心の動き、「だった、しゅしゅ。

だった、しゅしゅ。」と汽車になりきる娘さんの表情、そして実家のある田舎の田んぼの中を電車が走る風景を思い浮かべて絵本の風景と重ね合わせる語り口、それらすべてが生き生きと描かれていたので、読みながら私もその風景の中に溶け込んでいく気持ちになりました。お母さんが三歳の子と同じ目線で絵本の世界に入って楽しむことで、子どもも丸ごと絵本の世界に入りきって想像力をふくらませることができんですね。

文章の構成もごく自然で、心暖まるエッセイを読み終えたときのような澄んだ気持ちになりました。